The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Displacementの素描
Author(s)	宮原, 曉
Citation	GLOCOLブックレット. 2015, 17, p. 89-101
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/55583
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

5

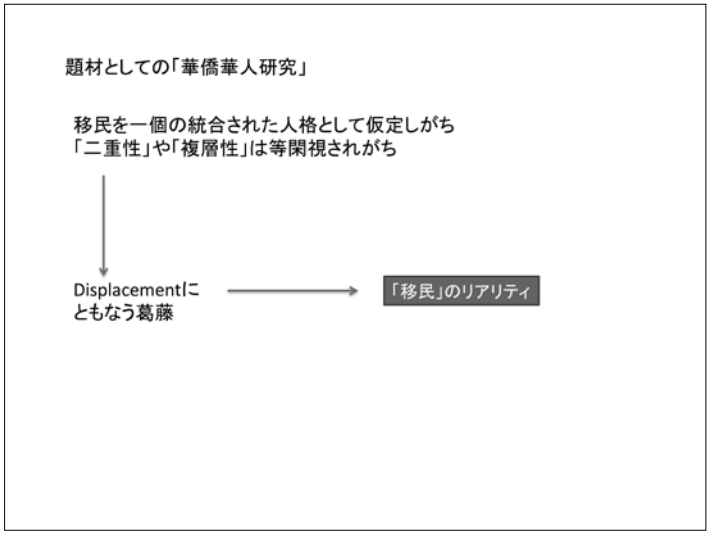
Displacementの素描

宮原　曉
大阪大学グローバルコラボレーションセンター教授

Samadar LavieとTed Swedenburgは、今日のdisplacementを、「場所からの自由」と「場所の剥奪」の相反する二つの面からの理解を試みた。西欧近代は、「文化」「人」「アイデンティティ」を、特定の地理的空間に結びつけようとするプロジェクトと言える。一方、現在をその後に来る時代という意味で「ポスト近代」と呼ぶならば、ポスト近代は、そうした近代的な結びつきから「人」が解放される、あるいは、近代的な結びつきを奪われる時代、ということになる[Lavie, Smadar and Ted Swedenburg, 1996]。

本報告では、中国系フィリピン人にフォーカスをあて、displacementに関する様々な事例を紹介し、人々がそれをどのような経験として翻訳しているかを議論する。議論を通し、displacement を、「自己」が「他者」を内在化するプロセスとしてとらえることで、人口移動に関する研究の新たな側面に光をあてようとする。

ジェイミー・マッキーは、東南アジアにおける中国系移民の歴史を扱った論集*Sojourners and Settlers*の導入部分で、「東南アジアにおけるチャイニーズ・ディアスポラの歴史は、ホスト社会への完全な統合と、長期にわたる共生ないし競合、及びこれら二つの極の間にあるさまざまな中間的な状態を例示している」と述べている[Mackie, 1996: xiii]。

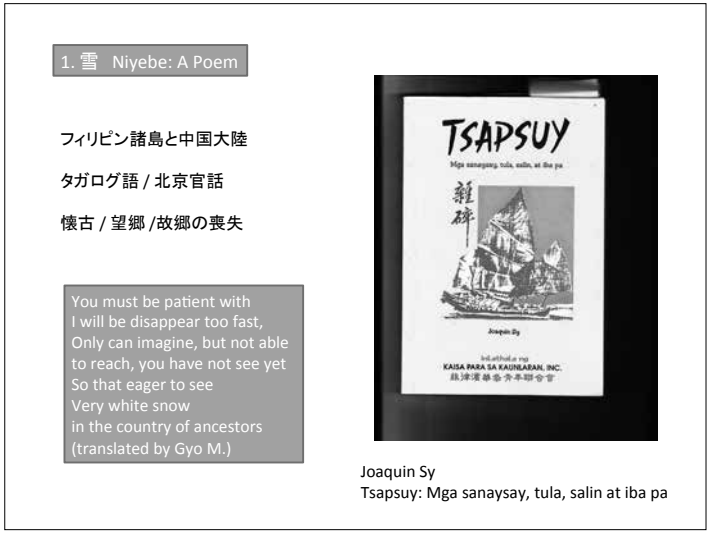


(Slide 01)

中国系移民や他の移民の研究は、移民を一つの統合された人格として定義し、displacementを経験した人のなかにある引き裂かれた事実(これをギルロイにならって、ここでは「二重性」(duality)と呼ぶことにする)には、焦点をあててこなかった。華僑華人研究がこれまで記述してきた立志伝中の人物や、アイデンティティと居住地の環境の間にギャップを感じる人は、「他者」の内在という観点をとることによって、そのリアリティにより接近することができると考えられるのである。

以下では、中国系の移民にまつわるエピソード中心に、様々なdisplacementを視野にいれて考えてみよう。

1. 雪



(Slide 02)

(Slide 03)

はじめに一つの詩を紹介しよう。この詩は、フィリピンに住む中国系の移民が、故郷に降る雪を思って書いた詩である。この詩には、いくつかの

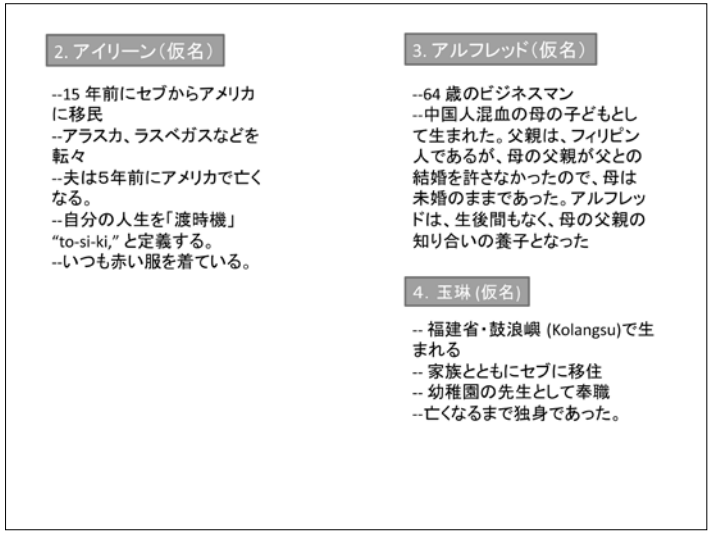
二重性を発見できる。

もちろん、熱帯のフィリピンには、雪は降らない。雪が降らないフィリピンで、雪を思うことが第1の二重性である。この詩がタガログ語と中国語の二つで書かれていることも、二重性の現れである。またタガログ語には、雪という単語がないので、スペイン語の借用語を用いざるをえない。

しかし、何よりも興味深いのは、筆者の出身地の福建省では、あまり雪が降らないにも関わらず、「雪」に託して、望郷の詩をかかなければならないことであろう。故郷がないままに、故郷を思うコトバもない状態で、故郷を思っているのだ。

この詩は、文学としてはあまり優れたものではないのかもしれない。筆者は、詩にでも託さざるを得ない、二重性に苛まれているわけではないのかも知れない。あるいは、鬼気迫る二重性を表現するコトバを持っていないのかも知れない。なお、この詩が掲載されているのは、TSAPSUYという本であるが、様々な野菜と肉をつかったこの料理の名前は、「ごちゃまぜ」という意味がある。

2. アイリーン



(Slide 04)

私の古くからの友人たちについても紹介したい。アイリーンは、セブの商業地区で漁業関連の資材を売っていた。中国系民俗宗教の熱心な信者でもあり、セブにある北斗娘娘の廟にも熱心に通い、家族の問題などについて廟に相談していた。15年ほど前に、娘がアメリカでナースになったことを機会に、アメリカに夫婦で移住した。はじめはアラスカ、そしてラスベガスとアメリカ国内を点々としている。5年前に、夫を亡くした彼女は、自分の人生について、「渡時機」（困難なことを何とかやり過ごす）と表現している。彼女は、いつも赤を着ている。運が悪くならないようにということである。

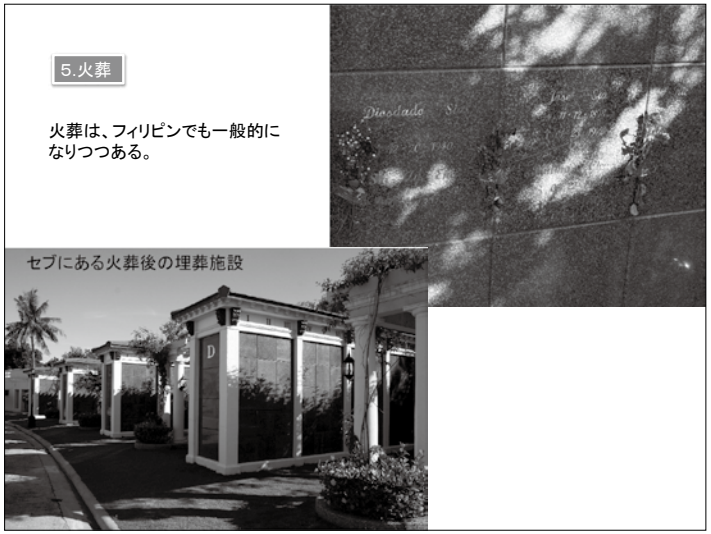
3. アルフレッド

アルフレッドとは、90年からの付き合いである。現在、64歳で、セブにあるハードウェアーのオーナーである。アルフレッドは、中国人混血の母の子どもとして生まれた。父親は、フィリピン人であるが、母の父親が父との結婚を許さなかったので、母は未婚のままであった。アルフレッドは、生後間もなく、母の父親の知り合いの養子となった。養父母には、子どもがなく、アルフレッドの弟も養子である。

4. 玉琳

玉琳は、鼓浪嶼で生まれた。家は中国にいたときから、プロテスタントで、母は幼稚園の先生をしていた。子どもの頃、一家でセブに移動し、母と同じように幼稚園の先生をしていた。フィリピンには、来たくて来たわけではなく、中国のcode of behaviorを常に強調した。玉琳は数年前に89歳で亡くなったが、一生独身であった。そのため、他人から軽んじられていると感じることがあった。また独身の女性であったがゆえに、遺産相続の際に不利であったとして、怒りをあらわにすることもあった。

5. 火葬



(Slide 05)

(Slide 06)

(Slide 07)

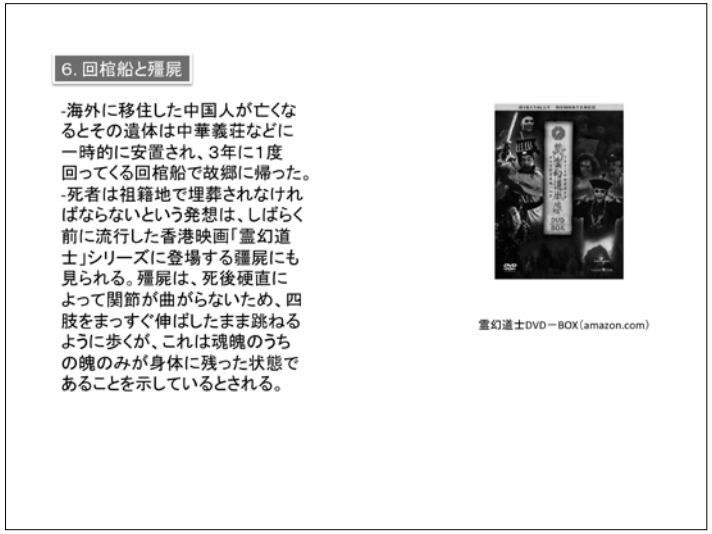
もう一人の女性と出会ったのは、彼女が亡くなった後である。今日のフィリピン、さらには東南アジアの中国系移民の間にみられる新たな傾向の一つに火葬の普及がある。彼女も火葬され、コロンバリウムの区画に祭られている。

女性が火葬を好むのは、夫の祖先祭祀に加わる違和感に原因があるのではないかと想像できる。女性は、生前、嫁ぎ先の家族の一員になることはないが、死後、夫側の祖先に合流する。セブで火葬場の設立に尽力したのは、ドニャ・モデスタ・シンソン・ガイサノであるが、彼女は、早くに夫を亡くし、息子達すべてをいったんは他家に養子に出しながら、後に彼女の母親の姓を冠した百貨店チェーンを設立した。

女系家族の長として、彼女は大きな影響力を持ったが、いわゆる宗族的なコンテクストでのそれではない。その証拠に、彼女の痕跡は、彼女の出生地にはいっさい観られない。フィリピンに渡った他の出身者の寄付によって建ったという学校や老人会、祖廟が、林立するのにもかかわらず、である。

火葬は、特に女性たちが祖先祭祀の連鎖から逃れる手段となっているのだ。

6. 回棺船と殭屍



(Slide 08)

かつて海外に移住した中国人が亡くなるとその遺体は中華義荘などに一時的に安置され、3年に1度回ってくる回棺船で故郷に帰ったという。横浜華僑義荘の場合、明治11年から大正12年まで40年余りの間、こうした回棺が続いた。

死者は祖籍地で埋葬されなければならないという発想は、しばらく前に流行した香港映画「霊幻道士」シリーズに登場する殭屍にも見られる。殭屍は、死後硬直によって関節が曲がらないため、四肢をまっすぐ伸ばしたまま跳ねるように歩くが、これは魂魄のうちの魄のみが身体に残った状態であることを示しているとされる（健部伸明ほか『幻想世界の住人たち』新紀元社 1988）。

20世紀に入ると棺はもはや祖籍地には戻されず、居住地で埋葬されるようになる。その後、土葬の慣行に変わり、火葬が普及し始めるが、これは東南アジア全般においてみられる傾向でもある。また風水も中国系を越えて広がり、以前に比べてポピュラーになってきている。

7. 祖先祭祀と風水

(Slide 09)

(Slide 10)

中国系移民の望郷は、部分的に、祖先を祭祀すること、祖先として祭祀されることに関係している。死後、故郷に帰ろうとするのは、移動先に

彼を祖先祭祀してくれる子孫がいないからである。一方、子孫達は、祖先祭祀を通して福禄寿を得ようとする。祖先の墓を適切に配置することで福を得ようとする風水も、その一つの手段である。

明代にジャワから中国に朝貢に訪れた使節の通訳は、故郷に帰り、祖先祭祀をしたい旨、訴え出たが(福建省志)、これも望郷の一つの形態には違いないが、祖先祭祀を通して福禄寿を得ようという企てと観ることができる。

祖先と子孫とのやり取りは互酬的である。従って、祖先からのご利益が期待できない場合、祖先祭祀は低調になる。

8. コロンバリウム

(Slide 11)

(Slide 12)

祖先祭祀の煩わしい連鎖から逃れる手段として、先に紹介した火葬は、この点でもメリットがある。祖先からご利益を期待できない場合にも、祖先に対して適切な祭祀をしないと、今度は災いがふりかかる、と考えられている。火葬は、ご利益は得られない代わりに、災いも避けることができる手段なのである。

火葬の普及は、祖先祭祀の煩わしさを回避するという意味合いの他に、90年代以降、加速する中国系住民の移動性をも反映している。カトリックは埋葬された死者を掘り返すことを死後5年間禁じている。土葬された死者は簡単には動かせないのである。これに対して火葬された骨は移動の制限を持たない。

コロンバリウムは、そうしたニーズに即応した施設である。火葬された骨壺を安置するコロンバリウムの区画は、約17万ペソ。空港からも近く、世界中に散らばる子孫達は、簡単に墓参できるようになっている。火葬は個々人を土地とのしがらみから解放し、帰るべき土地を自由に選択することを可能にする。それは風水の普及と根底で通じ合い、「中国」を拡張する。

9. 中国帰国者

近年、中国系移民の移動のベクトルは多様化している。ある時期、セブに居住していた中国系移民は、サンフランシスコへ再移民したり、中国大陸や香港、台湾へと還流したりすることが稀ではなくなってきている。「フィリピンの華人」と「ニューギニアの華人」と「福建の漢族」は、かつて別々の研究対象であり得たが、今日のサンフランシスコには、再移民した「元ニューギニア華人」と「元フィリピン華人」、新たにサンフランシスコに移民した中国系移民と古くから住む中国系移民が同調したり、衝突したりしながら居住している。

日本列島にとって、このうち特に重要なのが中国帰国者である。中国帰国者とは、戦前に満州に移住した日本人の子孫で1980年代以降の日本政府の帰国事業等で日本に帰国した孤児本人とその家族である。今日、約20,000人が日本国内で居住しているが、行政による定住化の支援が不足している等の問題がある。

中国帰国者は、2重、3重にdisplacedされた人たちである。彼ら彼女らは、日本人のなかにも、中国人のなかにも、居場所を求めることができない。あるいは自分たちを日本人のなかも、中国人のなかにも、位置づけたくない。彼らは、日本から中国へと希望を持って移動した。そして、再び中国から日本へと希望を持って帰国した。しかし、その移動は、同時に中国からも日本からもdisplaceされることを意味していた。

中国帰国者がこうした境遇に遭遇した責任は、日本政府、そして日本国民にその一端がある。国の中国帰国者の定住化のための学習支援や就労支援は充分ではなかった。中国帰国者の子どもたち、孫達がマフィア化するという問題も生じている。

しかし、中国帰国者のdisplacementに関して最も重要なことは、これらのことではない。日本に来るまでの彼らの境遇が、全否定されてしまっていることである。彼らは、homeに帰って来たのではない。彼らは、ホームと過去の時間を失ったものとして、中国と日本の間に位置づけられたのである。

おわりに

homelessというコトバには、貧困等のために、物理的なシェルターとそれに付随する様々なサービスを享受できない、といった意味がある。しかし、故郷と過去を失う経験を、homelessという語で表現するならば、上で述べたdisplacementのなかには、そうした故郷と過去の喪失を発見することができる。こうしたhomeless経験は、故郷への強い思いや喪失感のみならず、それによって周囲から、故郷との結びつきのなかで、過去に生きることを強要されたり、逆に過去の一切を否定されたりすることに対するフラストレーションも含まれる。失われたhomeを探し続けるよりも、homeがないという境遇に甘んずる方が、楽なこともある。

長年の努力の結果、特定の場所との結びつきから自由になる人もいれば、特定の場所との感情的なつながりを取り戻す、あるいはそれを強要される場合もある。土地の呪縛から離脱することができたことは純粋に喜ぶべきとしても、苦しい境遇を生き延びた過去が否定されることは、さらなる苦痛と迷いをあたえるかもしれない。逆説的ではあるが、homeのない状態を受け入れ、それに付随する生を自分の生として生きることは、homeを求め続け、過去を否定し続けなければならない境遇よりも、いくばくかましであろう。

displacementの本質は、これら多様なhomeless経験のなかに見いだすことができよう。

参考文献

Mackie, Jamie
1996 "Introduction." In Anthony Reid (ed.). *Sojourners and Settlers: Histories of Southeast Asia and the Chinese.* University of Hawai'i Press. xii-xxx.

Lavie, Smadar and Ted Swedenburg
1996 "Introduction: Displacement, Diaspora, and Geographies of Identity." Smadar Lavie and Ted Swedenjburg (eds.). *Displacement, Diaspora, and Geographies of Identity.* Durham & London: Duke University Press. pp.1-25.

Sy, Joaquin
1997 *Tsapsuy: Mga sanaysay, tula, salin at iba pa.* Manila: Kaisa para sa Kaunlaran.